小学校　音楽科　部会

部会長名　　弁城小学校　　校長　船瀬　安仁
実践者名　　上野小学校　　教諭　宮村　雅代

1　研究主題

自分なりの思いや意図をもって表現できる音楽科学習指導の在り方
～「聴き取り、感じ取り、表現する」一連の活動が連続発展する活動構成を通して～

2　主題設定の理由

小学校教育における音楽科の目標は、子どもたちに、表現及び鑑賞の活動を通して、「音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てる」「音楽活動の基礎的な能力を培う」を常に相互に関連させながら、豊かな情操を養うことである。したがって、実際の指導においては、心情と感性を育成する面と能力を伸長する面とが不即不離のものとして、取り扱い、育てていくべきものととある。

そこで、子どもが、「聴き取り、感じ取り、表現する」一連の活動が連続発展する中で､自分なりの思いや意図を持った表現ができる学習指導の在り方を主題として設定し、究明していくこととした。

3　主題の意味

（1）「自分なりの思いや意図をもって表現できる音楽科学習指導の在り方」について

「自分なりの思いや意図をもって」とは、子どもたちそれぞれの感性や経験、創造性が基盤となる。感じたことや考えたことを友達に表出する・友達と共有する経験、その時の満足感、達成経験、また積み重なった結果としての習慣がない場合､「表現できる」には行き着かないものでもある。音楽の表現活動においては、「自分なりの思い」は、音楽を形づくっている要素選択に反映され、「意図」は、音楽の仕組みに反映されると考える。このことからも、「自分なりの思いや意図をもって表現できる」には、「聴き取り」「感じ取り」の活動が必然であると考える。子どもの思いや意図をもとにした様々な音楽表現活動ができる音楽科学習は、音楽科が目指す「豊かな情操を養う」ことにつながる価値ある主題といえる。

（2）「聴き取り」について

「聴き取り」とは、音楽を形づくっている要素や音楽の仕組みに着目して、音楽を聴くことである。音楽を形づくっている要素とは、音色、リズム、速度、旋律、強弱、拍の流れやフレーズ、音の重なり、音階や調、和声の響きであり、音楽の仕組みとは、反復、問いと答え（模倣、対照、合いの手)、変化、音楽の縦（音の重なり）と横（時間的な進行）の関係などである。「聴き取る」能力を育てるためには、音楽を聴くときにその曲を特徴付けている要素に視点を置き聴き取る学習活動、要素一つひとつに視点を置いた楽曲を整理する学習の積み重ねが必要となる。また、音楽の仕組みに関しても同様である。

（３）「感じ取り」について

「感じ取り」とは、音楽の要素や音楽の仕組みの働きが生み出す安定感や力強さなどのよさや面白さ、美しさを感じ取ることである。このことは、音楽科の目標で言うところの「音楽に対する感性」に大きく関わってくると考える。楽曲の安定感や力強さなどのよさや面白さ、美しさに関心を示し、受け入れ、それを大切にしていくという学習の積み重ねが必要となる。

（４）「表現する」について

「表現する」とは、次の二点からとらえている。一つは、表現及び鑑賞をする中で、子ども自らが聴き取ったり感じたりしたことを話し合ったり、説明したり、記述したりする言語による表現である。もう一つは、その過程を踏まえて個人で、または集団で、工夫したり練り上げたりしてその楽曲に参加・体験していく音楽による表現である。「聴き取り」「感じ取る」音楽活動を通して、子ども一人ひとりが感じ取ったことや心に描いたことを、自分の言葉、自分の声、楽器、音素材を用いて「表現する」ことは、創造的な自己実現といえるとともに、このことこそが、楽しい音楽活動につながるものと考える。また、子どもたちの主体的な音楽活動への取り組みを実現させるためには、子どもの発達段階や実態を踏まえた支援が必要である。子どもたちが今持つ知識・技能を生かしつつ、さらに新しい表現活動を通して新しい知識・技能を身につけさせる支援が求められる。

４　研究の目標

子どもたちが自分なりの思いや意図をもって音楽表現活動できるようにするために、「聴き取り、感じ取り、表現する」一連の活動が連続発展していく活動構成の在り方を明らかにする。

５　研究の仮説

歌唱曲「おかしのすきなまほう使い」において、下記のような活動を連続させたり、友達の表現を参考にして発展させたりする学習を行えば、自分なりの思いや意図をもって音楽表現活動ができるようになるだろう。

・「聴き取る」段階で、曲想の特徴と楽曲を形づくっている要素や音楽の仕組みとの関わりを明らかにする。
・「感じ取る」段階で、楽曲を特徴付けている要素や音楽の仕組みが生み出すよさや面白さ、美しさなどを言葉で表現し、物語の一部を音のひびきで表現する活動において共有できるようにする。
・「表現する」段階で、いろいろな音のひびきを調べる活動を通して、音色、たたき方（演奏の仕方）、組み合わせ方などがどのような音楽的表現になるのか明らかにする。

６　研究計画　以下、研究授業の指導案より

題材名　「いろいろな音のひびきをかんじとろう」
教材名　「おかしのすきな　まほう使い」
共通事項　音色、音の重なり、反復、強弱、変化
児童　福智町立上野小学校　３年１組　２０名
授業者 福智町立上野小学校　教諭　宮村　雅代

（１）主題との関連

子どもの実態について

本学級の子どもたちは、興味を持って意欲的に取り組もうとする児童が多い。音楽が好きな児童が多く、歌の雰囲気や歌詞の意味を感じ取り、表情豊かに歌ったり、元気に歌ったり、楽しく表現しようとする姿が見られる。

これまでに児童は、楽曲や歌に合わせて簡単なリズムを即興的に作り、表現する活動に取り組み、楽しく音楽活動を行い、自信をつけてきている。

これらの活動においては、聴き合うことよりも曲に入り込んで表現することを楽しむ傾向が見られる。友達の表現のいいところは、すぐに取り入れることができるが、そのリズムや速度、強弱に決定した意味を振り返り、言葉で友達に表現することが少ない。

本題材、特に「おかしのすきなまほう使い」において、楽器で表現する意欲の高まりを大切にしながら、自分の表現への思いや意図を友達に伝えたり確かめながら演奏したり、友達の思いや意図を表現の中から感じ取り、伝えることを定着させたい。

題材（教材）について

本題材「いろいろな音のひびきをかんじとろう」は、様々な楽器で演奏したり、聴いたりする活動を通して、音のひびきを意識して、その組み合わせの面白さ、楽しさを味わうことをねらいとしている。

教材曲「おかしのすきなまほう使い」は、リズムにのって歌ったり、お話の世界に参加し、自分の描いたイメージに合う音を組み合わせて演奏したりすることできる教材である。音のひびきをよく聴いたり、音の出し方をいろいろ変えてみる活動を通して、音づくりや音の組み合わせ、重なりを工夫して音楽を作り上げる能力を育てることができる。また、歌唱に朗読が組み合わせられていることで、お話の世界の中で、自分のイメージをより確かに持つことができるとともに友達と共有することができる。音のひびきを感じながら、音楽の創作的な活動を友達と共に作り上げることのできる教材である。

教材「おかしのすきなまほう使い」の指導にあたって

- 「おかしのすきなまほう使い」の曲に出会い、自分のお話作りを言葉や絵で表現し、交流活動を通して同じイメージをもつ子どもたちとグループを結成させる。
- 「まほうの音楽のもと」となる様々な楽器の音色や演奏の仕方の体験・交流学習を行うことで音のひびきを感受させ、楽器カードに整理させる。
- 自分たちのまほう使いが、何をまほうにかけるか、朗読場面を話し合って作成する。
- 自分たちの思いや意図に沿った「まほうの音楽」をつくりあげていく活動の際、「まほうの音楽のもと」となる楽器カードを貼付しておく。
- 「まほうの音楽」を自分で練ったり、友達と作り上げ、練習したりする活動において、ワークシートに書き込ませることで、グループの話し合い、発表が円滑に行えるようにする。

題材（教材）の目標について

○　楽器の音の特徴や音色の違いを生かして、イメージに合う音を即興的に表現したり、反復などの音楽の仕組みを生かしてまとまりのある音楽をつくったりすることができる。

○　楽器の音の特徴や音色の違いを感じ取りながら、互いの楽器の音を聞いて音を合わせて演奏したり、楽曲の構造に気を付けて聴いたりすることができる。

（２）　題材の評価規準及び指導計画

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能	鑑賞の能力
①歌詞が表す場面を思い浮かべ、それにふさわしい歌い方を工夫し、思いや意図をもって歌う学習に取り組もうとしている。 ②楽器の音色やひびきなど音の特徴やを生かし、思いや意図を持って演奏に取り組もうとしている。	①　リズム、強弱、変化、反復を聴き取り、歌詞の内容を生かした表現を工夫し、どのように歌うかについて、自分の思いや意図をもっている。 ②　楽器のひびきを聴き取り、その特徴を感じ取りながらどの楽器で音楽をつくるかについて発想をもっている。 ③　音色やその重なりを聴き取り、それらが生み出すよさや面白さを感じ取って演奏の仕方について思いや意図を持っている。	①リズム、速さ、変化などの音楽を形づくっている要素に気づき、思いや意図を持って歌うことができる。 ②思いや意図を持って、音の音色ひびきや、重ね方、強弱、変化、反復などを生かした音楽づくりができる。	①リズム、強弱、変化、反復を聴き取り、曲の面白さや楽しさに気づくことができる。 ②友達の演奏を聴いて、音色や音のひびきのよさに気づき、伝えることができる。

段階	学習目標	○学習活動〔関連する共通事項〕	♦評価規準　（評価方法）
つかむ 1時間	「まほうの音楽」を入れて歌いましょう。	○歌詞が表す場面を思い浮かべながら歌う。〔リズム、旋律〕	♦ 歌詞が表す場面を思い浮かべ、それにふさわしい歌　い方を工夫し、思いや意図をもって歌う学習に取り組もうとしている。【関①】（演奏・行動観察、発言内容） ♦　歌詞の内容を生かした表現を工夫し、どのように歌うかについて自分の考えや願いをもっている。 【創①】（演奏・行動観察、発言内容） ♦ リズム、速さ、変化などの音楽を形づくっている要素に気づき、思いや意図を持って歌うことができる。 【技①】（演奏・行動観察、発言内容）
ふかめる	音のひびきを生かして自分たちの「まほうの音楽」をつくりましょう。	○いろいろな楽器の音色やひびきを聴いて、「まほうの音楽のもと」を調べる。 〔音色〕	♦　楽器のひびきを聴き取り、その特徴を感じ取りながらどの楽器で音楽をつくるかについて発想をもっている。 ♦ いろいろな音やひびきの組み合わせを工夫し、どのように音楽をつくるかについて発想をもっている。【創②③】（演奏・行動観察、発言内容、ワークシートの記述） ♦ 楽器の音の特徴や音色を生かした即興的な表現に進んで取り組もうとしている。　【関②】

3時間		②	（演奏・行動観察、発言内容、ワークシートの記述）
		○音の組み合わせや重ね方を工夫して、「まほうの音楽」をつくる。 〔音色、音の重なり、反復、変化〕**（本時）①**	♦思いや意図を持って、音の音色ひびきや、重ね方、強弱、変化、反復などを生かした音楽づくりができる。　【技③】 （演奏・行動観察、発言内容、ワークシートの記述） ♦ 自分たちのお話のイメージに合う「まほうの音楽」をつくるための考えや願い、意図をもって、音色やその重なりを聴き取り、それら楽器の音の組み合わせや重ね方、反復の仕方を試行錯誤している。【創③】 （演奏・行動観察、発言内容、ワークシートの記述）
あじわう2時間		○グループの「まほうの音楽」を発表する。 〔音色、ひびき、音の重なり、強弱、変化、反復〕　②	♦ リズム、強弱、変化、反復を聴き取り、曲の面白さや楽しさに気づくことができる。 ♦友達の演奏を聴いて、音色や音のひびきのよさに気づき、伝えることができる。　【鑑①②】 （演奏聴取、発言内容、ワークシートの記述）

3　本時の目標

楽器の音色やひびき、重なりを聴き取ったワークシートや楽譜を参考にしながら自分の思いや意図を友達に伝え、自分たちのイメージした「まほうの音楽」をつくる話し合い・創作活動ができる。

4　本時の展開

主な学習活動と内容	○教師の支援　　♦評価規準（評価方法）
1　今月の歌を歌う。 2　前時学習を想起し、本時学習のめあてをつかむ。 （1）前時学習をふり返り、「おかしのすきなまほう使い」を歌う。 （2）めあての確認をする。 めあて まほうがかなう自分たちの「まほうの音楽」を考えよう。 3　あわてた「まほうの音楽」や楽器カードを確認し、まほうがかなう「まほうの音楽」づくりの手順を話し合う。 4　グループに分かれ、「まほうの音楽」づくりを始める。	○　伸び伸びと歌わせ、音楽への学習の意欲を高めさせる。 ○　自分の想像したまほう使いになり「おかしのすきなまほう使い」を歌い、「まほうの音楽」づくりへの意欲付けを図る。 ○　前時の活動を振り返り、「まほうの音楽のもと」づくりの時につくった楽器カードを参考にして話し合い、２回目の「まほうの音楽」を完成させることを確認する。 ○　あわてた「まほうの音楽」を想起させ、まほうがかなう「まほうの音楽」にするための方法を交流し、手順を板書する。 ○　音の組み合わせ、重ね方、反復、強弱や速度の工夫と自分たちの思いや意図のつながりを意識させるため、ワークシートを拡大した表を中心に話し合いを進めさせる。

	・　楽器、演奏の仕方、思いや意図は、マジックの色を変えて記述させる。 ・　「まほうの音楽」作りの手順が曖昧になっているグループには、助言する。 ○　机間指導を行い、自分たちの思いや意図が表現に生　かされているか、助言していく。 ・　音楽の要素と自分たちの思いや意図が結びついているかを尋ねながら、必要な場合助言する。
5　つくった「まほうの音楽」の中間発表をして、互いの演奏を聴き合い、友達の表現のよい点を話し合う。	○完成したグループの発表を聴く。 ○音色やひびきのよさ、音の重なりや反復の面白さ、強弱・速さの変化を意識できるよう次の２点を行う。 ・　演奏する前に、グループ点や組み合わせた楽器、音の種類を発表するように促す。 ・　視覚的にもグループの工夫がわかるように表を黒板に貼る。 ・　発表の仕方を「よい点は、～です。それは、～だからです。」という発表に合わせて、色分けした【音色・音のひびき・音の重なり・反復・強弱・変化】の６種類のカードを貼り、よい点がわかりやすいようにする。
（５）学習をふり返り、次時の活動計画を話し合う。	○自分たちの「まほうの音楽」を友達の演奏のよいところに学び、よりまとまりのある「まほうの音楽」に仕上げ、発表会をすることを確認する。

７　指導の実際

第１時　（つかむ）

つかむ段階では、本単元導入で学習計画を立てる際に、「おかしのすきなまほう使い」の範唱ＣＤを聴かせ、楽曲の雰囲気をつかんだり、楽器演奏の「まほうの音楽（まほうの呪文）」が入ることに気づかせたりして楽曲に興味を持たせた。【資料１】

教材曲を「聴き取る」場面では、音楽を形づくっている要素や音楽の仕組みに着目して教材曲を聴き取ることをねらいとしている。

まず、「おどりたくなったわけ」について意見を求め【資料２】、次に、「この曲のいいとこみつけ」と題して、よく聴いて思ったこと、感じたことを交流（表現する）した。さらに交流した言葉音楽を形づくっている要素や音楽の仕組みの言葉に置き換え、音楽の言葉で「聴き取る」活動を体験した。子どもた

教材曲を初めて聴いたとき
・気持ちがうきうきした。
・面白い曲だと思った。
・呪文をかけてみたい
・おどりたくなった。
・歌詞がお話になっている。

【資料１】

おどりたくなったわけを考えよう
・おどるのにちょうどいい
・リズムがあるから（タータタッタ）
・はずむ感じがいい
・はやさがいい
・まねがおどってるから

【資料２】

ちは、「同じです。」「付け加えがあります。」という友達の言葉に後押しされ、細かいところまでよく聴き曲のいいとこみつけを行い,音楽を形づくっている要素や音楽の仕組みとなる言葉と意味を整理することができたと考える。【資料２】これからの学習活動の話し合いにおいても「まほうの音楽」や「まほうのお話づくり」などアイデアを出し、反対に「難しいと感じること」も素直に出し、まずは、「楽器調べ」を行うことで、より楽しく「音楽づくり」ができると期待感を持つことができた。【資料３】

①楽器調べ
②失敗の「まほうの音楽」作り
③発表会
④成功の「まほうの音楽」作り
⑤練習（朗読の役割決め）
⑥コンサート
⑦ふりかえり

【資料３】学習計画づくり

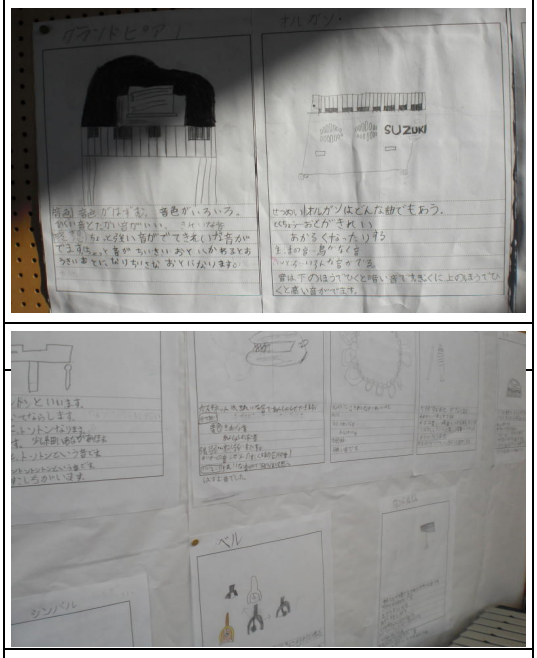
この時間の最後に歌った歌は、歌詞が表す場面を思い浮かべながら歌う姿が見られるとともに、リズム、速さなどの音楽を形づくっている要素を楽しむように、体を揺らしたり、おどったり、ま女になりきったように呪文をかけたりして歌うことができた。　【資料４】

【資料４】同じお話班で歌う子どもたち

第２時　（ふかめる）

深める段階（３時間）では、まず１時間目に、楽器の音やひびき調べを行った。【資料５】

楽器を選び、音やひびきならしたり、確認したりして、「まほうの音楽のもと」となる楽器カードを２８枚完成させた。２０人が、一斉に楽器調べを始めると、「音が聴き取りにくい」「想像できない。」と言うことで、１班（５人ずつ）１０分間ごとお話作りと平行させて活動を行うことに変更した。



【資料５】楽器の音やひびき調べ

楽器カードには、音色やひびきから感じたこと自由に書いた。（楽器カードに楽器の絵を描きたいという訴えがあり、準備した写真は使わなかった。）

友達が書いた楽器カードを読んで、付け加えを行う姿も見られた。活動の初めは、音楽室が騒然となる程楽器をならす姿があったが、班交代を始めてからは、たたき方が慎重になってくるとともに、耳を傾けてたたいり、たたいた後耳を澄ませたりする姿に変わってきた。ほかの班の活動を見聴きし、班で打ち合わせを行う姿も見られた。

【資料６】どんなまほうをかけようか。

お話作りは、いろいろな発想が膨らみ想像の世界で遊ぶ姿が見られた。中には、自分の世界を

伝えるばかりで、友達の世界がイメージできずに、なかなか班の物語が、まとまらない班も出てきた。

①　パーティが好きなまほう使いが山をお城にかえたくてまほうをかけると山火事になった。落ち着いてイメージしてまほうをかけると山がお城になり、友達をたくさん呼んで一週間パーティをした。

②　お金の好きなまほう使いが葉っぱにまほうをかけたらビー玉や鳥の羽になった。落ち着いてイメージしてまほうをかけるとお金にかわって、みんなで山分けして幸せになった。

など、どの班も楽しい物語が完成した。

次の１時間は、失敗の「まほうの音楽」作り。あわてた感じを音を大きく鳴らしたり、ばらばらにたたいたり、即興的に行う様子がうかがえた。大きな音や速くならす姿にあわてんぼうの魔女像が現れていた。交流会の際には、ハロウィンということもあり、衣装を着けて演奏するグループもあり、魔女になりきって演奏した。【資料８】

（１）朗読１（魔女の願い）
（２）１番前半を創作歌詞で歌う。
（３）失敗の「まほうの音楽」
（４）朗読２（魔女の気持ち）
（５）成功の「まほうの音楽」
（６）１番後半を創作歌詞で歌う。

【資料７】創作作品の流れ

【資料８】失敗の「まほうの音楽」発表

【資料９】　板書「深める段階」

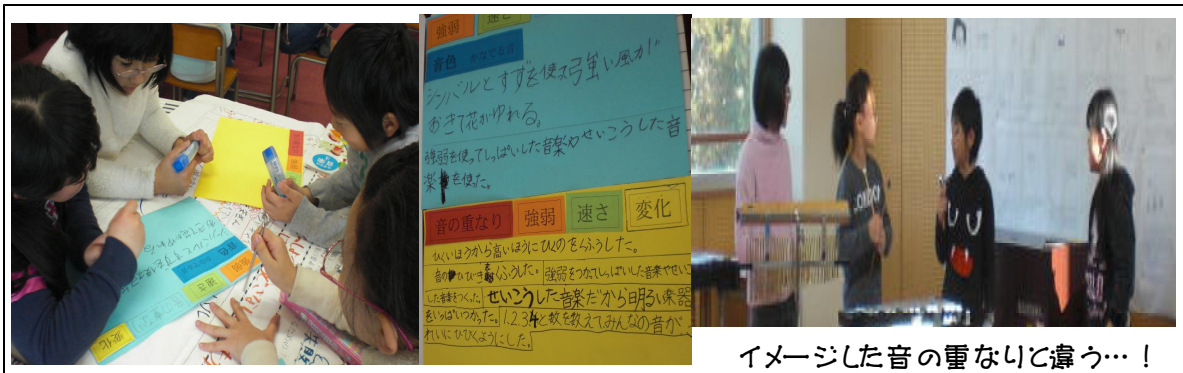
本　　時

深める段階２時間目では、いよいよ成功の「まほうの音楽」づくりに取り組む。失敗を成功に導く「まほうの音楽」の観点は、「真剣に音をならす。」「ひびきが伝わるように、ていねいに演奏する。」など演奏する時の観点が出され、音色、音の重なりなどの音楽の素や強弱、変化などの仕組みの観点が出されないまま、ワークシートに取り組ませた。【資料９】ワークシートには、音楽の素や音楽の仕組みを色別カードで示していたので創作の話し合いをしていくうちに音楽のもとや仕組みに気がついたり、楽器の音を出して考えたりしながら、成功の「まうの音楽」づくりの話し合いが徐々に活発になっていった。【資料 10・11】

【資料 10】　大太鼓を和太鼓にかえよう

【資　料 11】　楽器の音の組み合せや重ね方を話し合う。

１回目の「失敗したまほうの音楽」に縛られている班も見られたが、音色やひびきの変化をわかりやすくすることから話し合いが一気に進んだり、即興的に行った失敗の演奏を生かし成功の「まほうの音楽」にするために試行錯誤した結果、音の重なりや強弱に変化をつけることで創作が進んだりする姿が見られた。本時で話し合ったことを楽器の音色やひびきを確認しながら決定したり、速さや強弱、変化などの効果が自分たちの思いや意図につながっているかを聴き合い、練習する時間が必要となった。【資料 12】



【資料 12】　楽器の工夫したところを書き出し、演奏前に説明しよう。

第３時　（あじわう）

味わう段階では、１班ずつ、「まほうの音楽」の説明、「まほうの音楽」の演奏、感想の交流の順で行った。【資料 12】

Ⅰ「まほうの音楽」の説明　Ⅱ「まほうの音楽」の演奏　Ⅲ　感想の交流

【資料 12】　いよいよ発表だ。作り上げた「まほうの音楽」を聴いてください。

どの班も、自分たちの創作した「まほうの音楽」を説明するとき、自分たちが工夫したところを一際誇らしげに発表した。特に発表の際は、友達を見守ったり目で合図を送りあったりして、友達の演奏をよく聴いて自分の演奏をスタートさせる姿が印象的だった。交流の際は、音楽のもとや仕組みの言葉を用いて友達の発表を価値づけたり、感動したことを伝える姿が多く見られて、活発な交流会となった。

【資料 13】　①～⑥まで通して発表。僕らの工夫を聞いてください。

８　成果と今後の課題

成果　○　つかむ段階の「聴き取り、感じ取り」は、それを音楽の言葉を使って交流する（表現する①）ことで「聴き取り、感じ取り」が具体的に表され、より確かな「聴き取り、感じ取り」に向かっていることが交流活動で確認できた。音楽の言葉を繰り返し表現することで、楽曲における音楽の要素や音楽の仕組みのいいところや面白いところについて子どもたちがイメージを持ちやすく、交流活動で意見（言語活動）が活発に出される基盤となった。子どもたちの思いや意図が反映される表現活動にもつながっていくことが確認できた。ゆえに、「聴き取り、感じ取り、表現する」一連の活動が必要である。また、連続していくうちに発展していき、深まっていくことも確認できた。このような活動構成を組むことで子どもたちの思いや意図による達成感のある学習活動を形成していくことができる。

○　音楽の要素や音楽の仕組みの聴き取りについては、「音色は、」「リズムは、」「強弱は、」「旋律は、」「反復など構成は、」などの観点を持たせる学習経験の積み重ねが、次の楽曲に出会ったときのよりわかりやすい「聴き取り」「感じ取り」につながり、「聴き取り」「感じ取り」の深まりや広がり、「言葉で表現する」交流学習(伝え合う活動)の楽しさ、満足感を味わう学習となる。

○　この単元の学習により、「音のひびきは、」の観点を持たせることができた。

課題　○　自分たちの物語の「まほうの音楽」を意識して、音の組み合わせを考えたり、音の重なりを確かめたりして、音やひびきが作り出す世界を感じ取る活動を行った際に、使いたい楽器が先行し、物語の内容を変える子どもたちが出てきた。このことは、「まほうの音楽のもと」調べの時に物語を完成させたことにより出てきた混乱と考える。子どもたちは、深める段階２時間目、音やひびきの組み合わせや重なりを調べたときに、イメージを広げたり、使いたい楽器やひびきが確かになった。「この楽器やひびきを使いたい」という思いが先行した。子どもの意図を「まほうの音楽」に反映させる点からも、深める段階２時間目を終わらせて、物語を完成させるべきであったと考える。「思いや意図」は、物語を作り上げることで明確に持たせられると考えていたが、音やひびき感じ取ることによって、子どもたちの「思いや意図」が確かになることこそが、「音やひびきを感じて」の学習の表現であったと考える。

○　創作したものを確認、練習させる際は、音色やひびき、音の重なりをよく聴かせるために、一班ごとの演奏ができる場、時間の設定が必要となった。今回は、急遽、教室では図工の活動、音楽室では一班ずつ２０分間活動と、場所と時間の設定を行ったが、どちらかの場と時間に教師不在の状況を生んでしまった。

引用・参考文献

・小学校学習指導要領(平成１０年・平成２０年)・小学校学習指導要領解説(平成２０年)
・初等科音楽教育法〔改訂版〕　音楽之友社
・「聴き取る力や感じ取る力を高め、創造的に表現したり、鑑賞したりする能力を育成する学習の充実」　（２００８　初等教育資料９月号）
「特集　基礎的・基本的な知識・技能の　習得と思考力・判断力・表現力等の育成」
（２００８　初等教育資料９月号）